



Story その島は、至るところに「置屋」が点在する。本土からは日に二度連絡船が出ており、客の往来の足となっている。住民たちはこの閉塞された島で一生を過ごす。女は客から「外」の話聞いて思いをはせる。男は、女たちのそんな「夢」を一笑に附して留まらせる。ある置屋にその「三兄妹」はいた。長男の哲雄は店を仕切り、その凶暴凶悪な性格で恐れられている。次男の得太は哲雄にこびへつらい、子分のようにしがっている。長女のいぶきは、長年の持病を患い床に伏している。ここで働く4人の個性的な遊女たちは、哲雄に支配され、得太をバカにして、いぶきに嫉妬していた。女を売る家で唯一女を売らず、それどころか優遇された箱入り娘。しかも、いぶきはだれよりも美しかった。その美しいいぶきを幼少から見守り寄り添う得太であった…

6.4 fri 全国ロードショー



はるコ

鬼才・佐藤二朗が放つ豪華キャスト陣による狂演
これは、映画を超えた魂の記録なのかも知れない

山田孝之
仲里依紗 今藤洋子 笹野鈴々音 駒林怜 太田善也
向井理 坂井真紀 佐藤二朗
原作・脚本・監督・佐藤二朗

笑え、殺したいほど憎くても。

第35回 国際映画祭
ワルシャワ国際映画祭
1-2コンペティション部門
正式出品作品
最優秀脚本賞受賞

ひとり

6.4 fri

そうか、なるほど。

佐藤二朗のあのおつきな足の組織の中にはこんな感覚も潜んでいるのか。

恐ろしいなあ。

俺も何者かになれる日は来るのだろうか。

明日も大切に生きよう。

小栗旬 [俳優]

困った！ 伝える言葉が見つからない。

「虚ろ」と「嘘」

の二文字が耳にこびりついて邪魔をする。逃げ切れない痛み、追いつけない悲しみ、絶望、そして…最後に心の奥底に届くたまらない愛おしさ。不思議だ。理屈を越えて、無条件にカラダの芯が熱く痺れる。

奥山和由 [映画プロデューサー]

こんなにも心を揺さぶり、ボロボロになった体を優しく抱きしめてくれる映画があったらどうか。佐藤二朗監督が描く

ヒリヒリした世界

にドップリと浸ることができた私は幸せだ。オールタイムベストに入れたい作品!

奥村百恵 [映画ライター]

マジ二朗っ！ マジ山田っ！

とにかく観れっ！

福田雄一 [映画監督・演出家]

どうしてもなく追い込まれてしまった人間の究極的な悲劇と究極の喜劇が同居している。出演している全ての演者さんの芝居に引き込まれる。間違いなく、二朗さんにしか作れない映画。

ゾクゾクしました。

水野美紀 [俳優]

マグマのようなエネルギーに満ちながら繊細。泥水を描きながら清冽。汗と暴力の裏に潜む兄弟愛。陰と陽が共存する不思議な世界。いったい

佐藤二朗の頭には何が入っているんだろう？

この島はサトジロのワンダーランドに違いなし。

杉田成道 [演出家]

役者さんたちの様々な顔を見る映画だと思う。表情と言つてもいいが、あえて

「顔」。

それこそが二朗の見たかった、見せたかったもの。なんじゃないかと思う。

鈴木裕美 [演出家]

今、ほうほうの体で私は島を逃れ、灰色に荒れ狂う海を渡っている。島では激しい搾取が繰り返され、そこで生きる人々は貧しさにたえながら明日からの明報を待ちつづけた。島を振り返る。私は、

狂おしい宴

のような佐藤二朗の最高の物語を愛おんでいる。

新井敏記 [「SWITCH」編集長]

苦難は乗り越えられる。生きていることに意味がある。時として、これは残酷な言葉でしかない。歩けない僕は、昔、自ら命を絶とうとした。もがき苦しんで、耐え忍んで、その先に、かすかな、

一筋の光明

が見えた。僕は一步一步、自分の人生を、自分なりに歩んでいるのだろう。進もう。踏み出そう。少しずつ、少しずつ。

垣内俊哉 [株式会社ミライロ 代表取締役社長]

麻痺なんて贅沢。

苦しみを哀しみも切り刻んで生きる。人生を生き抜く為の「言葉」が眩いほどに飛び散っている。佐藤二朗監督の残酷で瑞々しい愛の人生名言集映画だ。

綾野剛 [俳優]

家族にまともなわりつく呪いの物語。

愛を知らない人たちの、幸せになりたいという切なる願いに何度も胸を打たれた。

笑え。

今がどれだけ辛くとも。

藤井道人 [映画監督]

二朗さんの裏側には世間は

度肝を抜かれる

でしょう。本当に裏側なのか。元来こっちが表なのか、とにかく

名前のごとく朗らかな二朗さんの影も形もありません。他の演者方も普段の影も形もありませんでした。映画と言う船でこの恐ろしくも愛おしい島に、いざ

斎藤工 [俳優・映画監督]

私は舞台版の演出を担当しました。その時の出演者達が映画版で活躍していて、感涙に咽いでおります。知らない顔なのにたくさんセリフを喋ってるのが、そいつらです。

どうぞ拍手を。

堤泰之 [演出家]

皆が知ってる佐藤二朗だけが佐藤二朗じゃない。この映画を観たあと、皆が知ることになる。

知って欲しい二朗さんがいます。うむ。

ムロツヨシ [俳優]

山田孝之を筆頭に出演者、そしてスタッフ陣までもが台本に宿る「佐藤二朗成分」にまみれ、格闘した

“化学反応”

が、1カットごとに全篇、スリリングに展開してゆく。

轟夕起夫 [映画ライター]

嫉妬するほど、心をえぐられました。せめて、惜しみなく拍手をおくらせていただきます。

目を背けてはいけない

作品に出会いました。劇場で、また観たい。

安田顕 [俳優]

海があった。怒りがあった。人間がいて、
愛をさがしてる。

山口隆 [ミュージシャン (サンボマスター)]